

はじめに

大学のグローバル化の必要が叫ばれ続けています。しかし、グローバル化とはそもそもどのような事態を示すのか、しかも大学というさまざまな領域の知を探求する場がグローバル化するとはどういうことなのか、これらは必ずしも自明なことではありません。私たちは、「教育」を冠する学部・研究科に所属する教職員として、教育学部・教育学研究科という組織がグローバル化するとはどういうことなのか、そして教育学がグローバル化するとはどういうことなのか、を真摯に考え続けてきました。いまだに答えはありません。反面、教育学という観点から見た場合、教育学部・教育学研究科が、学生・院生教育を通して、教育学研究の深化と進化を図ること、つまり組織と研究との間には、学生への私たちのかわりが媒介としてあること、そしてその教育とは、ある種の強制性をともなうものであること、このことは疑いを得ないことのように思われます。

教育が強制性を持つということは、つまり、私たちは学んだ後でしか何を学んだのか知り得ない、という学びの事後性と深くかかわります。それは、学ばされなければ、自分が何を学んだのかわからないということでもあります。その意味では、私たちは、否応なく学びの場におかれること、そういう絶対的に受動的な存在であることで、はじめて絶対的に主体的・能動的に学びをはじめることができるということでもあります。そして、だからこそ、私たちは、つねに学生・院生との関係においては、大学という場にあっては、関係の本質において強制的・権力的であるがゆえに、その本質を支える場面においては、対等で、民主的でなければならないと考えています。

このような考え方を基本として、まずは学生・院生たちを日常の生活の文脈とは異なる場に置いて、「教育」という営みとそれをめぐるさまざまな事象や制度、そしてその「学」を考えさせることを、私たちは進めてきました。この取り組みの一環として、そしてそれをグローバル化とかかわらせて行うために、私たちの学部・研究科では、部局間協定校との初めての学生交流プログラムとして、2015(平成 27)年 3 月にストックホルム大学教育学部 (2014(平成 26)年に学術交流協定締結)との間で「グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム」を実施しました。教育学部においては、協定校との協力により学生交流を促進する初めて試みとなった交流プログラムです。この試みは、東大の学部総合改革における教育学部の取り組みの一環にも位置づけられています。

プログラムでは、グローバル時代における学校教育について学ぶことを目的とし、教育学研究科・教育学部とストックホルム大学教育学部との共催の国際シンポジウムでの研究発表の他、学生交流、スウェーデン教育庁や現地学校の訪問などが行われました。また今回は、教育学研究科附属学校教育高度化センター2014(平成 26)年度研究プロジェクト「若手研究者国際発信力向上プログラム」の大学院学生も、このシンポジウムで研究発表を行いました。プログラムを通じて、はじめてストックホルム大学の学生と交流する場に投げ込まれた私たちの学生・院生たちは、戸惑いながらも、研究発表をこなし、研修に参加し、訪問先で質

問し、知見を深め、そして何よりもストックホルム大学の学生たちと楽しい時間を共有し、友情を深め、たった 3 日間という短期間に、引率の教職員が目を見張るほどの成長を見せてくれました。これこそが、教育の力なのだと思います。そして同じことは、受け入れて下さったストックホルム大学の学生たちにも起こっていたはずです。

今回のような交流プログラムは、教育学部・教育学研究科のグローバル化やこれまでも進められてきた協定校との交流をさらに促進する意味で、重要な一步となったと思われます。大学のグローバル化とは何か、という問いには、未だに答えられないままですが、しかし、上記のように、対等で民主的な関係の中で、共変化することによる能動性の獲得、そこから得られる「教育」という営みとその「学」への新たな知見と視点、そしてそれらをもとにして、さらに次の一步を踏み出そうとする意志の意識化、こういうものがグローバル化を構成する大切な要素であるということだけは、いえるのではないかと思います。それはまた、私たちの学部・研究科が「教育」という名前を冠していることの意味の重大さを改めて私たちに突きつけるものとなったと受けとめています。

今後、このような海外大学・研究機関との交流が続けられていくことで、教育学部・教育学研究科における教育と研究のグローバル化がさらに発展的に進み、それが「学」の深化を促すことを願っています。

2015 年 3 月
国際交流委員会委員長
牧野 篤